

な が お
長 尾 遺 跡 2

- 第3次調査の報告 -

2014
福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えた福岡市には数多くの文化財が存在しています。それらは本市のみならず国のかけがえのない財産であります、開発によりやむを得ず失われる埋蔵文化財については事前に記録保存調査を行い、後世に伝えるようつとめております。

本書で報告する長尾遺跡は、油山の北麓、樋井川流域に展開する遺跡で、弥生時代の遺跡として有名な宝台遺跡と一連をなす遺跡群です。樋井川流域における重要な遺跡の一つと考えられておりますが、これまで実施された発掘調査は少なく、遺跡の実態についてはよく分かっておりません。

本書で報告する第3次調査地点は遺跡の北東縁辺に位置しますが、弥生時代前期から中世の遺構や遺物がみつかり、遺跡の具体的な歴史的変遷を明らかにする資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用いただけることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例　言

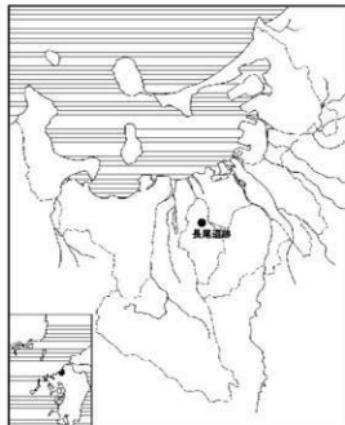
1. 本書は城南区長尾4丁目68、69敷地内の共同住宅建設工事に先立って福岡市教育委員会が実施した長尾遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告は森本幹彦が担当した。遺構の実測と写真撮影は担当者が行い、遺物の実測と製図は熊埜御堂和香子（技能員）が行った。金属遺物の処理は上角智希（福岡市埋蔵文化財センター）が行った。
3. 調査の基準座標は調査区の形態に合わせた任意のものである。本書で用いている方位記号は全て磁北で、真北より $6^{\circ} 18'$ 西偏している。
4. 遺構の略号は、溝をSD、土坑をSK、柱穴をSPとしている。
5. 各調査の出土遺物や実測図、写真などの記録類は平成26年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管する予定であるので、広く活用されたい。

本文目次

| | |
|--------------------|----|
| I. はじめに..... | 1 |
| 1. 調査に至る経緯..... | 1 |
| 2. 調査の組織..... | 1 |
| II. 位置と環境..... | 2 |
| III. 第3次調査の報告..... | 2 |
| 1. 調査の概要..... | 2 |
| 2. 調査の記録..... | 4 |
| 1) 遺構..... | 4 |
| 2) 出土遺物 | 4 |
| 3.まとめ..... | 13 |

挿図・写真目次

| | |
|--|----|
| Fig.1 調査地点と周辺 (1/50000、1/10000、 1/1000) | 3 |
| Fig.2 第3次調査区全体図 (1/80) | 5 |
| Fig.3 土層図 (1/50) | 6 |
| Fig.4 SD001出土土器・陶磁器実測図 (1/3) | 9 |
| Fig.5 SD001・004出土土器・陶磁器実測図 (1/3) | 10 |
| Fig.6 近世溝混入土器・SD001混入弥生土器実測 図 (1/3) | 11 |
| Fig.7 弥生土器、土師器、須恵器実測図 (1/3) | 12 |
| Fig.8 石器、石製品実測図 (1/2) | 13 |
| PL.1 1. I区全景 (南から) | 14 |
| 2. SD001 (南から) | |
| PL.2 1. II区全景 (南から) | 15 |
| 2. SD001、SD004、SD003 (北から) | |
| PL.3 出土遺物 | 16 |



| 長尾遺跡第3次調査 | |
|-----------|-----------------------|
| 遺跡調査番号 | 1142 |
| 遺跡略号 | NGO-3 |
| 調査面積 | 163 m ² |
| 地番 | 福岡市城南区長尾4丁目68、69 |
| 分布地図番号 | 長尾63 |
| 調査期間 | 2012(平成24)年2月1日～2月22日 |

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

2011（平成 23）年 9 月 22 日付けで個人事業者より福岡市教育委員会宛に、城南区長尾 4 丁目 68、69（敷地面積 443.92 m²）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会がなされた（事前審査番号 23-2-571）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である長尾遺跡内であり、2011 年 10 月 3 日に埋蔵文化財第 1 課事前審査係で試掘調査したところ GL - 40 ~ 90 cm の深さで遺構・遺物の存在が確認された。この成果をもとに協議を進めたが、建設工事にあたっては地盤改良工事等が必要で遺構の破壊を回避できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することになった。調査対象は建設工事範囲の 200.09 m²で、実際の調査面積は 163 m²である。調査・整理費用には国庫補助が適用された。2012 年の 2 月 1 日から 2 月 22 日まで発掘調査を実施した。整理作業は平成 25 年度に行つた。

2. 調査の組織

調査委託 個人事業者

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

【平成 23 年度（発掘調査時）】

調査総括 文化財部長 藤尾浩

文化財部埋蔵文化財第 2 課課長 田中壽夫

埋蔵文化財第 2 課調査第 2 係長 菅波正人

庶務担当 埋蔵文化財第 1 課 管理係 井上幸江

事前協議 埋蔵文化財第 1 課事前審査係長 宮井善朗

事前審査係 木下博文

調査担当 埋蔵文化財第 2 課調査第 2 係 森本幹彦

なお、文化財部は組織改編のため平成 24 年 4 月 1 日付で教育委員会から経済観光文化局に移管しており、整理・報告を実施した平成 25 年度の調査の組織は以下の通りとなつてている。

調査総括 福岡市経済観光文化局

文化財部部長 西島裕二

埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

埋蔵文化財調査課調査第 2 係長 櫻本義嗣

庶務担当 埋蔵文化財審査課 管理係 横田忍

報告担当 埋蔵文化財審査課 事前審査係 森本幹彦

II. 位置と環境

長尾遺跡は油山北麓の中・高位段丘上の遺跡で樋井川西岸の遺跡の一つである (Fig.1)。遺跡は市域のほぼ中央に位置する。油山に端を発する樋井川は遺跡のすぐ東を北流し、潟湖がひろがっていた大濠から鳥飼周辺の古・鳥飼湾に注いでいたとみられる。流域周辺は低丘陵地帯で、大きな平野はみられないものの、集落形成に最適な台地が多く、遺跡の密度は高い。

弥生時代研究の標識遺跡である宝台遺跡とは間に谷を挟むものの、一連の丘陵に立地する遺跡で、「長尾遺跡群」として一括りにされることもある。樋井川を挟んだ北東側の、鴻巣山から派生する丘陵には弥生時代後期の墳墓群として古くに調査された小佐遺跡が存在し、支流を挟んだ西側には神松寺遺跡、浄泉寺遺跡、カルメル修道院内遺跡、片江遺跡群などがある。さらに西側の丘陵上には飯倉遺跡群があり、早良平野との区画になっている。

長尾遺跡内は古くに宅地造成が進んだために、旧地形や遺跡があまり遺存しておらず、発掘調査事例は少ない。「1次調査」は宝台遺跡と一括りにされていた「長尾遺跡群」のときに調査されたもので、宝台遺跡北西の谷に立地する調査地点である。現在長尾遺跡としている範囲内（およそ南北 1 km、東西 0.3 km）で実施された発掘調査は 2 次と 3 次の 2 件にすぎない。2 次調査（調査番号 0424）は専用住宅建設に伴うもので、遺跡中央部付近に位置する。弥生時代中期とみられる炉跡や溝などがみつかっており、台地上縁辺に立地する集落の一部とみられる。今回報告する第 3 次調査地点は遺跡の北東縁辺で、弥生時代中期や中世の溝等がみつかっている。

III. 第3次調査の報告

1. 調査の概要

本調査地点は長尾遺跡の北東部で、東に面する樋井川に向かって落ちていく緩傾斜地である。現況は宅地で、表土は宅地の盛土と旧耕作土下、GL - 30 ~ 90 cm 前後で遺構面となる。台地上遺構面の標高は 9.5 m 前後で北と東に向かって低くなる。地山は上層から、鳥栖ローム、黄褐色粘質～シルト、青灰色シルト～砂礫となっている。

調査は敷地内で廃土を処理しなくてはならないため、北半部 (I 区) と南半部 (II 区) に分けて行った (Fig.2 の B ラインで二分)。主な遺構は中世前期の溝 2 条と弥生時代中期後半の溝 1 条である。他に中世の溝を切る近世溝や時期不明の土坑等があるが、建物に伴うような遺構はみられない。台地上は削平されており、台地東肩から斜面に位置する溝群のみが遺存していたような状況である。

出土遺物はコンテナケース 10 箱で、弥生時代前期から後期の土器、石器、古墳時代前期や後期の土器、中世（13 世紀前後）の土器・陶磁器である。

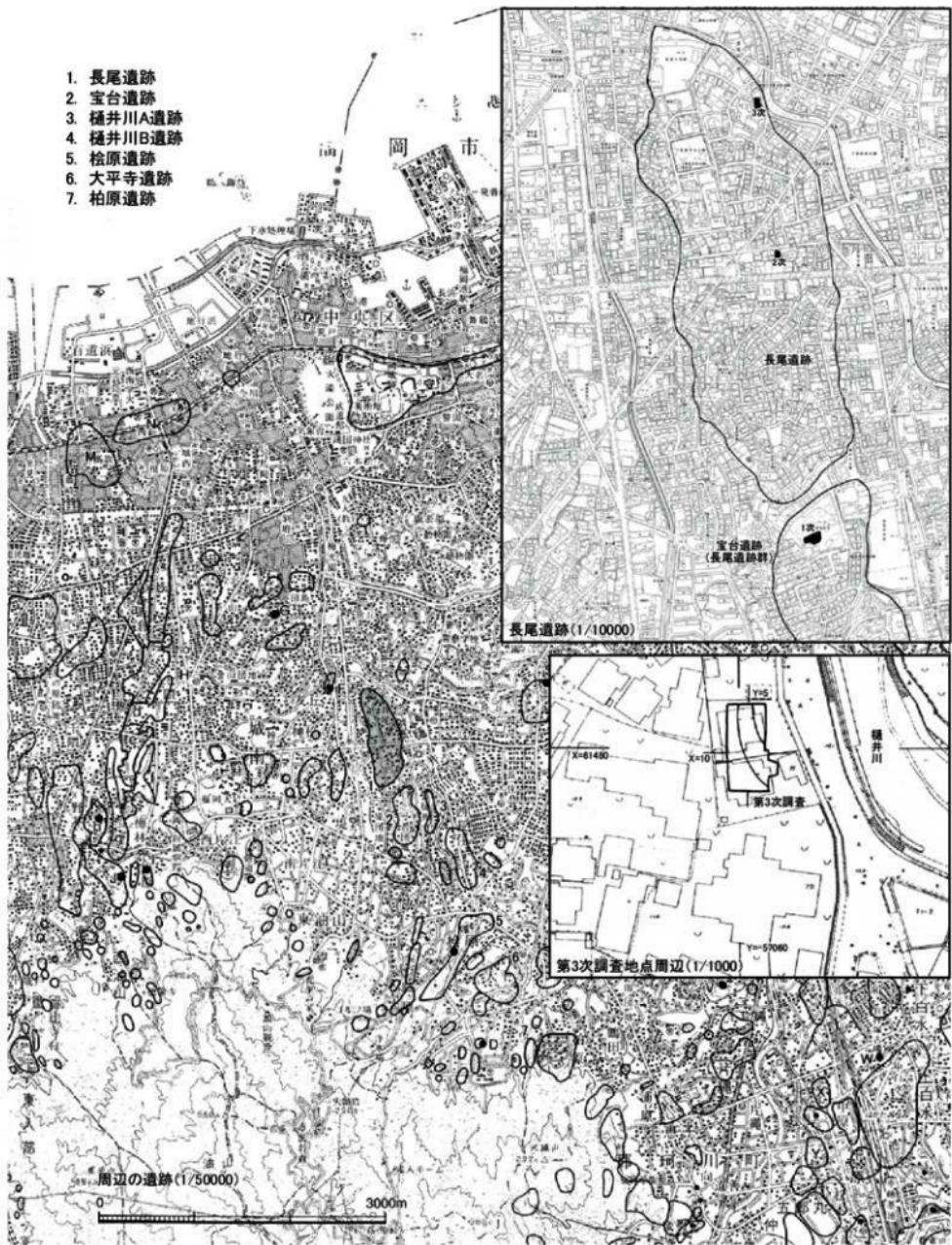


Fig. 1 調査地点と周辺 (1/50000、1/10000、1/1000)

2. 調査の記録

1) 遺構 (Fig.2, 3)

① SD001

幅 2.4 ~ 3m 前後、深さ 0.5 ~ 0.6m を測る南北方向の溝である。調査区内で南北長 14.5m を検出した。東方へゆるやかにカーブし、調査区南部（C ライン周辺）でクランク状に屈曲する。屈曲部付近は水口周辺の掘方で、溝南部の直線延長線が削平されている可能性があるが、明確ではない。近世溝や SK002（時期不明、近世以降か。長さ 200cm、深さ 70cm。）に切られ、SD004 を切る。溝底の標高は A ライン 9.15m、B ライン 9.25m、C ライン～D ライン周辺は 9.1 ~ 9.2m 前後である。B ライン周辺が高く、北と東に向かって低くなるとみられる。

B ライン周辺の下層では直径 5 cm ほどの木杭を 3 本検出している。打ちこまれた状態のものは 2 本であるが、杭下端は地山面下 3cm または、覆土下層におさまるので、SD001 がある程度埋没してから打設されたものであろう。簡易な構造の井堰があった可能性がある。

箱掘りであるが、西壁は東壁に比べて傾斜角度が緩く、水流の影響による浸食とみられる。覆土は上層が暗灰褐色シルト、下層は暗灰色粘質土が主体となり、C ライン付近では茶褐色砂が上下層に混じる。覆土は自然の埋没による堆積とみられるが、砂層の堆積があまりないのは、機能時に浚渫等の管理がよくなされたためであろう。遺構の時期は出土土器・陶磁器より 13 世紀後半前後とみられる。

② SD003

調査区南部で検出した幅 80cm 前後、深さ 5 ~ 20cm 前後を測る南北方向の溝である。直線的な溝であるが、平面プランが不整形で、底面も凸凹があるが、底面の標高は 9.9 ~ 10.1m 前後である。遺構の下部がかろうじて遺在したものとみられる。長さ 7m を検出した。覆土は暗褐色シルト層である。時期は出土土器から弥生時代中期後葉である。

③ SD004

幅 1.5m、深さ 0.5m 前後の溝で南北長 9m を検出した。北側は SD001 と重複する。溝底の標高は 9.4 ~ 9.5m 前後である。覆土は SD001 と類似しており、上層は暗灰褐色シルト、下層は暗灰色粘質土が主体となる。調査区南端で、溝底が土坑状に 10cm ほど落ち込んでいる。遺構の時期は出土土器・陶磁器より 13 世紀前半とみられる。SD001 等から出土している古い陶磁器の一群は SD004 の時期を示す混入とみられる。

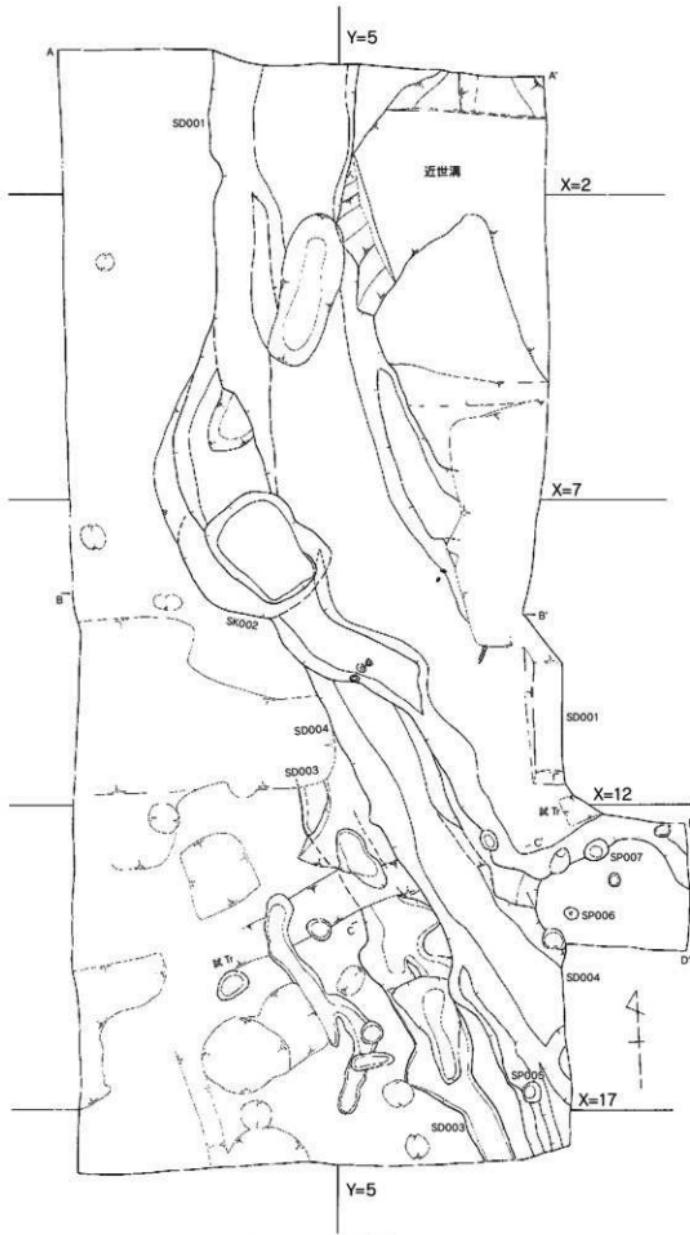
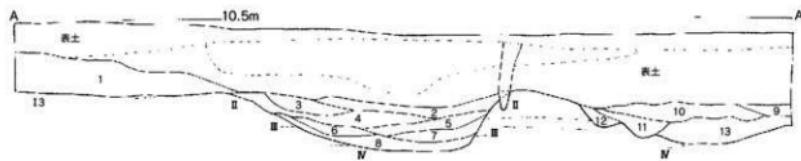
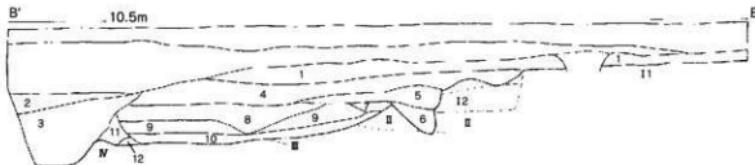


Fig. 2 第3次調査区全体図 (1/80)



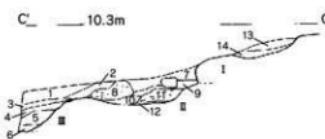
A' A' ライン土層説明

1. 黒赤褐色土
2. 緑褐色土
3. 緑褐色土+黒灰色土
4. 緑灰褐色土 (黒色み) 主体
5. 緑灰褐色土 (灰色み) *2~5層 SD001 上層
6. 棕黄色粘質土主体
7. 黃褐色粘質土
8. 緑灰褐色粘質土 (しまりなし)
- *6~8層 SD001 下層
9. 灰褐色砂砾
10. 灰褐色土
11. 紫灰褐色粘質土+褐色砂砾
12. 灰色粘土+黃褐色シルト
13. 黄色粘土ブロック+緑灰褐色粘質土
- *9~13層 SD001
14. 黄褐色粘土
- II. 黄褐色シルト
- III. 黄褐色粘質土 (小塊混じり)
- *I~N地山



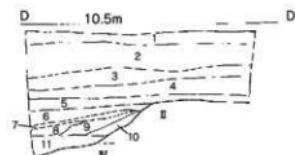
B' B' ライン土層説明

1. 緑褐色粘質土
2. 緑褐色土
3. 緑灰褐色土+黒灰色土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土 (黄褐色土ブロック層) *6層は SK002 南西側
6. 紫灰褐色土
8. 紫灰褐色土+綠褐色粘質土・ブロック
9. 紫灰褐色土 (黒み)
10. 紫灰褐色粘質土
- *7~10層 SD001
11. 黄褐色粘質土
12. 緑褐色土 (黒み)
13. 緑赤褐色粘質土 (島状ローム)
- II. 黄褐色粘質土
- III. 黄褐色粘土
- N. 黄褐色土



C' C' ライン土層説明

1. 黄褐色砂砾
2. 紫灰褐色土
3. 黄褐色砂
4. 紫灰褐色粘質土
5. 黄褐色砂
6. 綠褐色粘質土
- *1~6層 SD001
7. 紫灰褐色土
8. 黄色土ブロック (灰色粘質土層)
9. 黄褐色粘質土
10. 灰色粘質土
11. 黄褐色砂砾+灰色粘質土
12. 紫灰褐色土
- *7~12層 SD004
13. 紫灰褐色土
14. 灰褐色土
- *13~14層 SD003



D' D' ライン土層説明

1. 黒色土帯
2. 紫灰褐色土
3. 灰褐色土
4. 黄褐色粘土
5. 黄褐色粘質土
- *1~5層は盛土 (3~5層は旧水田耕作土層)
6. 黑灰褐色土 (灰層)
7. 紫灰褐色粘質土
8. 灰褐色土
9. 灰褐色粘質土
10. 紫灰褐色土
11. 紫灰褐色粘質土
- *6~11層 SD001

Fig. 3 土層図 (1/50)



2) 出土遺物

出土遺物はコンテナケース 10 箱である。13 世紀前後の中国陶磁器、瓦器、土師質土器、弥生時代中期の土器が主体であるが、弥生時代前期、後期、古墳時代前期、後期の土器等も出土している。土器以外では弥生時代の今山産玄武岩製磨製石斧や黒曜石剥片などが出士している。

① SD001 出土土器・陶磁器 (Fig.4・5)

Fig. 4 の 1 ~ 5 は SD001 出土の中国陶磁器である。

1 ~ 3 は龍泉窯系青磁碗である。1 は内面に櫛描の飛雲文がある I 類。2 は外面に脈入陽刻の蓮弁文がある I 類。高台内に墨書がある。花押であろうか。器高 8.2 cm、口径 18 cm、高台径 5.8 cm に図上復元できる。3 は外面に鎬蓮弁文、見込に界線が施される II -1 類。

4、5 は白磁碗である。4 は高台内に判読不明の墨書があり、見込に目跡がある IV -3 類。5 は見込に櫛描文が施される VI -2 類。6 は瓦器椀で、外面は黒化処理されている。

7 ~ 20 は土師器の杯・皿である。

7 ~ 13、17・18、20 の底部に糸切りを確認でき、9、10、13、16、20 に板目状圧痕がある。14、19 は明確でないが、底部へラ切りの可能性がある。

法量は 8 が口径 13.7cm、底径 10.2cm、器高 2.7cm、9 が口径 14.1cm、底径 11.0cm、器高 2.5cm 前後、10 が口径 12.8cm、底径 9.1cm、器高 2.7cm、11 が口径 12.1cm、底径 8.9cm、器高 2.5cm、12 が口径 13.0cm、底径 9.4cm、器高 2.2cm、14 が口径 11.3cm、底径 7.9cm、器高 2.5cm、16 が口径 11.8cm、底径 7.5cm、器高 3.0cm、18 が口径 8.7cm、底径 6.3cm、器高 1.6cm、19 が口径 9.2cm、底径 5.8cm、器高 1.4cm、20 が口径 8.0cm、底径 5.8cm、器高 1.8cm。主として 13 世紀代の型式とみられる。

21 は土師質の鍋で、口径 46.8cm に復元できる。口縁形態が「L」字形をなし、内外面ハケメ主体の調整が施される。外面に煤が付着。

Fig. 5 の 1 ~ 5 も SD001 出土土器である。

1 は須恵質の鉢である。2 は土師質の擂鉢である。

3 ~ 5 は土師質の鍋である。いずれも口頸部が内反り気味のゆるい「く」字形をなす。口径は 24.8 ~ 26.4cm である。外面にびっしりと煤が付着しており、器面調整がみえないが、内外面ともにハケメ主体の調整とみられる。

② SD004 出土土器・陶磁器 (Fig.5)

Fig. 5 の 6 ~ 10 は SD004 出土の土器、陶磁器である。

6 は朝鮮半島製の粗製青磁皿である。胎土と焼成は須恵質で、内外面に目跡がみられる。

7 は陶器で四耳壺とみられる。色調は明赤灰色を呈する。

8 は土師質の擂鉢である。

9、10 は土師器の杯・皿である。いずれも底部は糸切り調整で、板目状圧痕がみられる。

9 は口径 14cm、底径 10cm、器高 2.6cm、10 は口径 8.4cm、底径 6.2cm、器高 1.5cm。

③ I 区近世溝等出土の中世陶磁器・土器 (Fig.6)

Fig. 6 の 1 ~ 5 は I 区近世溝等出土の中世陶磁器・土器である。SD001 からの混入であろう。

1 は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬蓮弁文、見込に界線と草花状の文様が施される II -1 類。2 は白磁碗IV類である。3 は天目碗である。疊付は軸が搔き取られ目跡がある。4 は瓦器椀である。口径 16cm、底径 5.7cm、器高 6.4cm に復元できる。5 は土師質の鍋である。口径 49.4cm に復元できる。口縁端部に面をもち、胴部に稜線がある。外面の上部を中心に煤が付着。ハケメ調整主体とみられる。

④ SD003 出土土器 (Fig.6)

Fig. 6 の 6 ~ 10 は SD003 出土の弥生土器である。6 は鋤先口縁 (T 字形に近い) の甕、7 は甕底部付近、8 は広口壺、9 は鋤先口縁の甕、10 は断面三角形に近い貼付口縁の甕である。8 は橙色を呈するが、丹塗りかどうかは不明である。中期初頭～後葉の土器が出正在しているが、遺構の時期は中期後葉、須玖 II 式古段階とみられる。

⑤ その他遺構等混入の弥生時代～古墳時代の土器 (Fig.6・7)

Fig. 6 の 11 ~ 12 は SK002 出土混入土器である。

11 は付加口縁の須恵器系土師器甕で古墳時代後期か。12 は弥生中期後葉の甕底部付近である。13 は SP006 出土、弥生中期後葉の甕底部である。

Fig. 6 の 14 ~ 21、Fig. 7 の 1 ~ 7 は SD001 混入の弥生土器である。

14 は如意形口縁甕で弥生前期後半とみられる。15 は弥生中期後半の屈曲口縁甕、16、17 は弥生後期のく字口縁甕小片 (後者は古墳後期の小型甕の可能性もある)。とみられる。18、21 は甕底部、19、20 は壺底部である。弥生中期後葉が多い。1、3 は鋤先口縁甕、2 は丹塗りと暗文を有する精製の鋤先口縁甕である。4 は鋤先口縁 (T 字形に近い) の甕、5 は屈曲口縁甕、6 は蓋、7 は高杯脚部である。弥生中期中葉～後葉を主体とするものである。

Fig. 7 の 8 ~ 14 は SD004 混入の弥生土器である。

8 は鋤先口縁 (T 字形に近い) の甕である。9 は鋤先口縁高杯で内外面ともに丹塗りであった可能性が高い。10 ~ 13 は甕底部である。14 は支脚である。12、13 は中期前半の上げ底、14 も同時期のものであろう。

Fig. 7 の 15 ~ 19 は I 区近世溝等混入の弥生土器である。

15 は大型のく字口縁甕で、弥生後期前半である。16 は鋤先口縁の無頭壺で、外面と内面口頭部に丹塗りが施される。17 は上げ底の甕底部である。18 は脚付のミニチュア土器である。19 は支脚である。

Fig. 7 の 20 ~ 25 は SD001 等混入の土師器、須恵器である。

20 は小型丸底壺、21 は高杯、22 は竹管文を有する複合口縁壺、23 は高杯脚部で、古墳前期の土師器である。24 は甕、25 は長方形透孔を有する高杯で古墳後期の須恵器である。

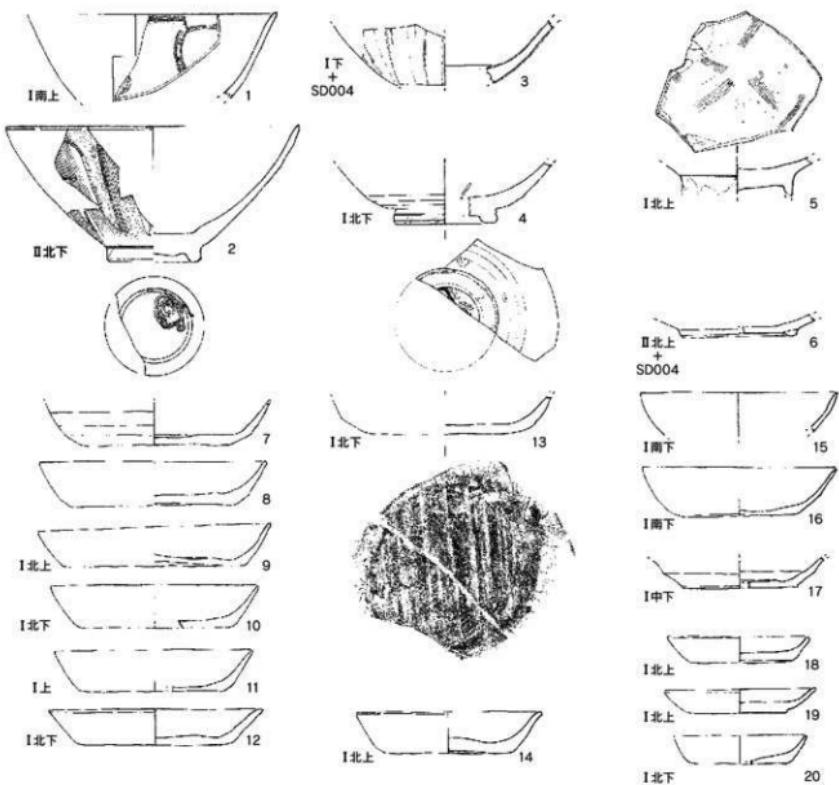
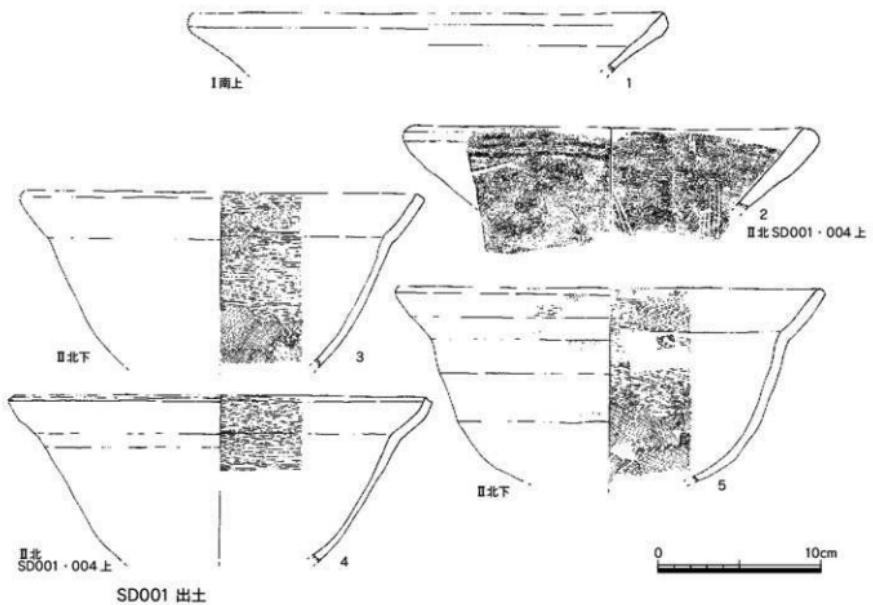


Fig. 4 SD001 出土土器・陶磁器実測図 (1/3)



SD001 出土

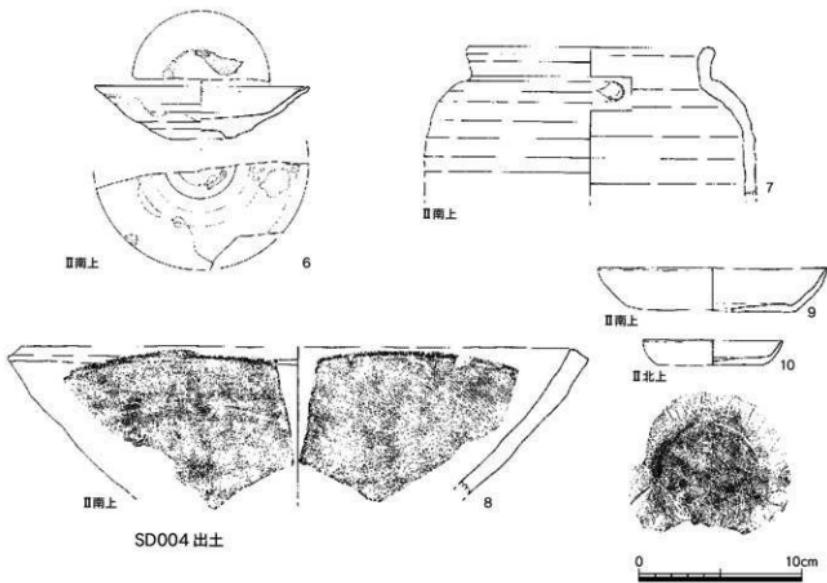


Fig. 5 SD001・004 出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

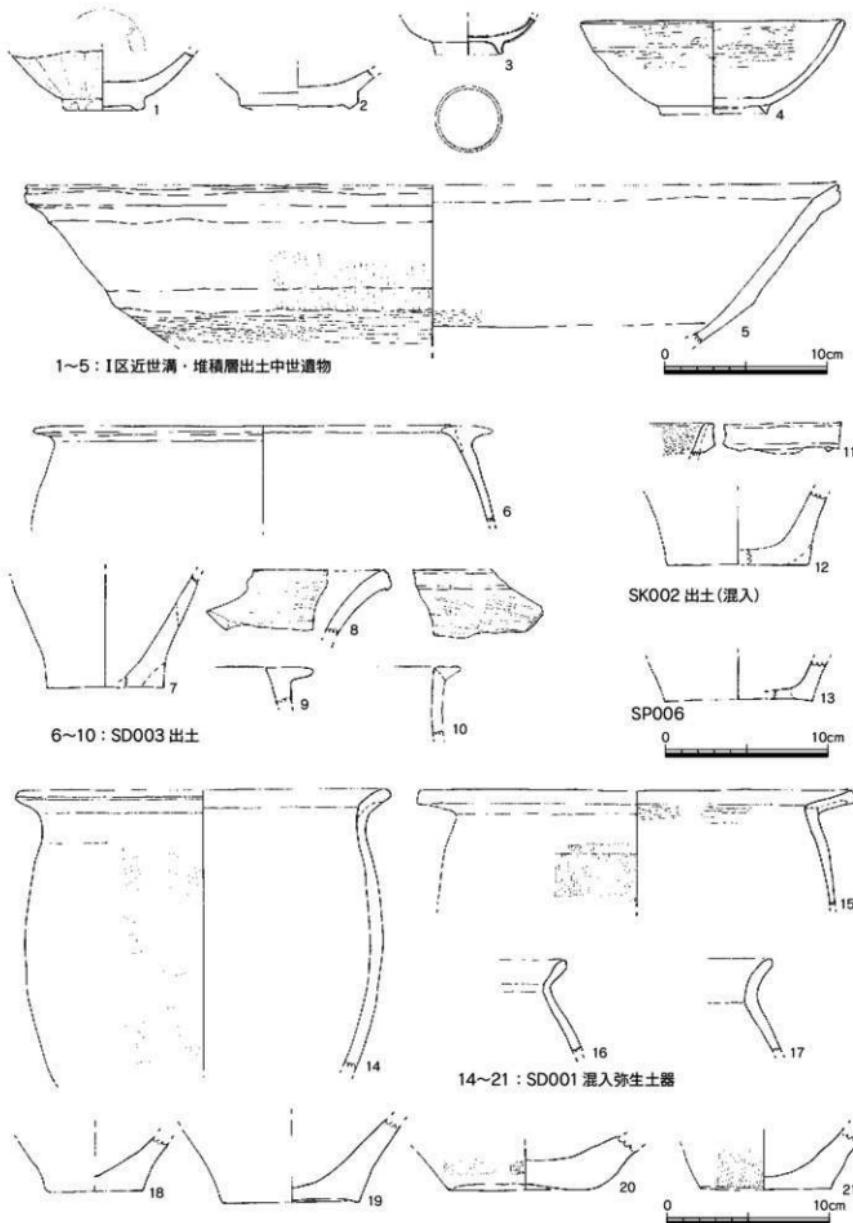
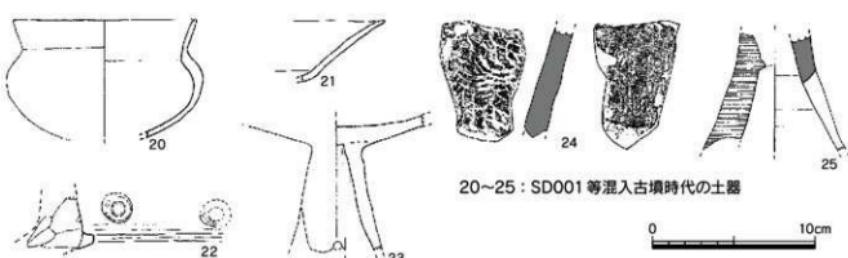
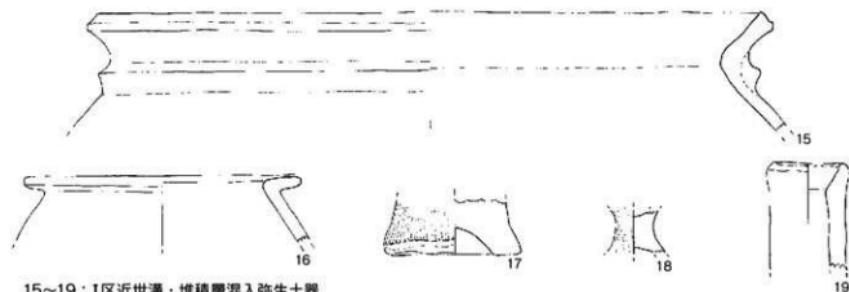
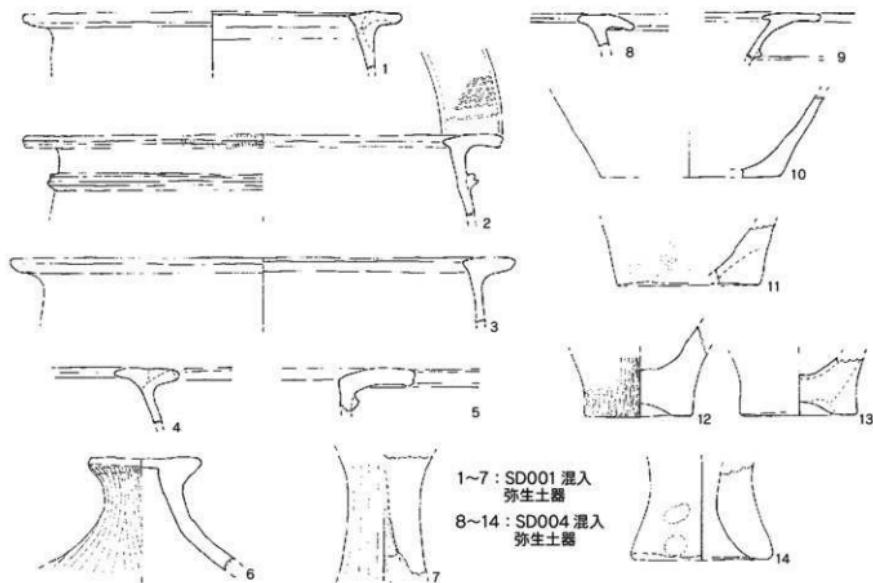


Fig. 6 近世溝混入土器、SD001 混入弥生土器実測図 (1/3)



0 10cm

Fig. 7 弥生土器、土師器、須恵器実測図 (1/3)

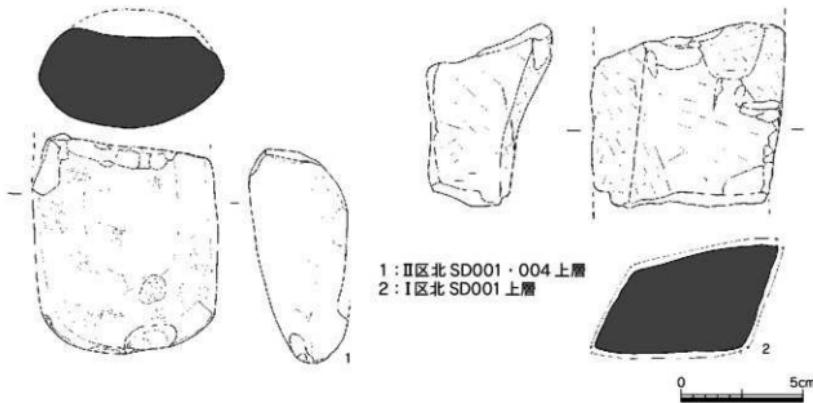


Fig. 8 石器、石製品実測図（1/2）

⑥石器 (Fig.8)

Fig. 8 は SD001 等出土の石器である。1 は今山産玄武岩製磨製石斧である。刃の潰れや基部側の折損は伐採斧としての使用によるものであろう。2 はシルト岩製の砥石である。

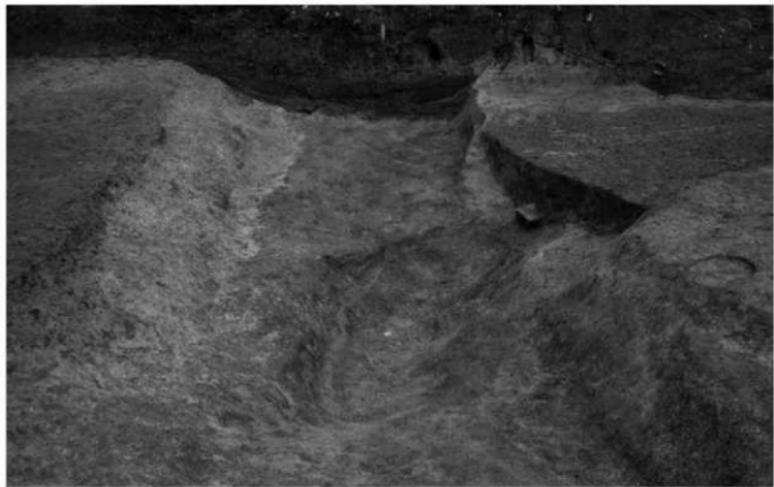
3.まとめ

第3次調査地点は長尾遺跡の台地北東縁辺部で、弥生時代中期後半と中世前期の溝を検出した。いずれも集落縁辺に配された灌漑等の用水路で、水源は東側の樋井川水系と考えられる。中世の溝は2条あり、連続して付け替えられたものとみられる。時期は出土陶磁器に12世紀的なものも含まれるが、土師質土器等とのセットからみて、13世紀代の中で推移したものとみられる。

古代以前の遺物には造構の時期を示す弥生中期後半の土器が多いが、弥生前期後半～中期前半、後期前半、古墳時代前期前半、後期後半といった時期の土器も含まれており、近隣集落域の消長を示唆する。



1. I 区全景（南から）



2. SD001（南から）



1. II 区全景（南から）



2. SD001、SD004、SD003（北から）

PL. 3 出土遺物（番号は挿図に対応）



報告書抄録

| ふりがな | ながおいせき 2 | | | | | | | | | |
|----------------|--|------------|------------|------------------------------------|--------------------|---------------------------|------|------------|--|--|
| 書名 | 長尾遺跡 2 | | | | | | | | | |
| 副書名 | 第3次調査の報告 | | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第1232集 | | | | | | | | | |
| 編著者名 | 森本幹彦 | | | | | | | | | |
| 編集機関 | 福岡市教育委員会 | | | | | | | | | |
| 所在地 | 〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1 | | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2014年3月24日 | | | | | | | | | |
| ふりがな 所取遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 遺跡番号 | 東経 度 | 発掘期間 | 発掘面積 m ² | 発掘原因 | | | |
| ながおいせき 長尾遺跡 | 福岡県福岡市 城南区長尾4丁目 | 40130 | 0203 | 33° 33' 22" | 130° 22' 59" | 20120201 ~ 20120222 | 163 | 記録保存 調査 | | |
| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | | | |
| 長尾遺跡 | 集落 生産 | 弥生時代～中世 | 溝、土坑 | 弥生土器・土師器・ 須恵器・輸入陶磁器 (墨書き)・石器 | | | | | | |
| 要約 | 第3次調査地点は長尾遺跡の台地北東縁辺部で、弥生時代中期後半と中世前期の溝を検出した。いずれも集落縁辺に配された灌漑等の用水路で、水源は東側の種井川水系と考えられる。中世の溝は2条あり、連続して付け替えられたものとみられる。時期は出土陶磁器に12世紀のなものも含まれるが、土師質土器等とのセットからみて、13世紀代の中で推移したものとみられる。 | | | | | | | | | |
| | 古代以前の遺物には遺構の時期を示す弥生中期後半の土器が多いが、弥生前期後半～中期前半、後期前半、古墳時代前期前半、後期後半といった時期の土器も含まれており、近隣集落域の消長を示唆する。 | | | | | | | | | |

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1232集

長尾遺跡2

- 第3次調査の報告 -

2014年(平成26年)3月24日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 大成印刷株式会社

